

は、古い伝統的な栽培地である事を示すものである。その後、温州蜜柑がこれにとって変わり当地域は和歌山県の核心地域として発展してきた。蜜柑園は従来、傾斜地に石垣積みの階段畑をつくって利用していたが最近、平地への進出が見られるようになった。これは地形の影響をうけ、排水のよい沖積錐段丘面上からはじめられたが、最近では、土地改良や排水整備により沖積地にも進出してきた。最近の10年間をみると、S37、38年に増殖のピークを示し、大部分の水田が蜜柑園に変えられ、水田のない農家、1~2反しか持っていない農家がふえている。増殖傾向を市町毎に考察してみるとかなりの差がみられるが、その原因は歴史と自然条件である。最も水田転換の盛んな有田市は歴史も古く適地は開墾されてしまったために、水田への進出も早かったと考えられる。当地域では今後も増殖が行なわれ、ますます蜜柑単一経営地域としての性格を強めていくと思われる。

出荷についてみると、S28年の水害を契機として共同化が大きく進められたが、出荷機構、出荷器、出荷先などに昔からの伝統が生きている。

松本盆地南部の地理学的考察

鈴木 みやこ

調査地域は長野県のほぼ中央にある松本盆地の松本市以南を占める。中央東線と西線の分岐点である交通の要地の塩尻を中心とした地域の農業の考察を行なった。但し盆地南部は台地の地形が広く、これを反映して畑作農業が卓越しており、北部の水田の卓越する地域と対照的であることから盆地南部の地域性を特色付ける畑作農業の商品作物栽培について調査をすすめた。

北流する奈良井川、鎖川により形成された扇状地は開析され、3つの台地となってこの地域の広い部分を占める、桔梗が原、今井原、古見原と呼ばれ、信州ロームが扇状地礫層上をおおい、果樹栽培、トマトや洋菜を中心とした蔬菜栽培がさかんに行なわれている。信州ロームの堆積は耕土が酸性になる欠点はあるけれども、現在行なわれている蔬菜や果樹の栽培には、ある程度の深さの耕土とローム層の保水性が水の少ないこの地域では有利な条件である。又広い平坦な地形面の存在が農作業を能率よくさせ、多量な栽培を可能にしており、農家一戸当りの耕地も比較的広く、生産を安定させる。

気候について見れば、内陸盆地に特有な、かなり乾燥した、寒暖の差のある気候を示し、又本地域が標高700m前後であるので高原に似た涼しさを示し、高原野菜の栽培が行なわれ、市場条件の

良い時に出荷出来る有利な点がある。その上日本の大市場である京浜、中京地区への交通条件が良く、輸送圏芸に最適地となっている。これらの好条件がそろい、戦後急速に養蚕や雑穀栽培から蔬菜や果樹栽培にかわり、畑作農業に大きな比重を占める様になった。しかし桔梗が原では明治末から原料用ぶどうのコンコード栽培が行なわれこの地域の果樹栽培の先駆となった。果樹の価格変動や、くずぶどうの処理に対処するため醸造業もあわせて発展したので、ぶどう栽培は着実に台地の畑作農業の中に浸透していった。甲州ぶどうとは出荷期の違う寒地性のぶどう栽培であるので競争に耐えることが出来た。最近では市場の要求と農業収入を高めるために生食用ぶどうの栽培が中心になる傾向が見られる。

盆地南部では地域によって果樹と蔬菜栽培が畑作農業に占める割合が違ふ。そこで果樹栽培による地域区分と、畑作全体による地域区分を行なった。果樹と蔬菜の分布状況の差異は自然条件ではなく社会的条件により生じたものである。両者の導入があまり行なわれない地域は自然条件の不利な場合である。

以上台地の多い盆地南部は、塩尻市が新産都市の指定を受け一部に工業の進出も見られたが、やはり畑作農業が最もこの地域を特徴付ける要素であり、東京や名古屋の市場と交通条件が良いため、果樹、蔬菜の栽培が有利に展開される。

大間々台地の地理学的考察

野 口 文 子

第一章 自然環境

第一節 概説……調査地域大間々台地は群馬県東南部、赤城山の南東部の裾野に続く扇型の全地域緩慢な傾斜をもった広い台地である。足尾山塊と赤城山との間に谷を作り南西流している渡良瀬川が、標高 220 m 附近の大間々町で山地より流れ出て、そこに砂礫を堆積してできたもので、標高 35 m 附近で利根川の沖積地に接している。

第二節 地形分類……(1)山地及び丘陵、(2)上位段丘面、(3)中段丘面、(4)下位段丘面、(5)台地面(木崎台地)、(6)沖積面、(7)谷床面と主にローム層の有無及び厚さを手がかりに、以上7つの地形面に分類した。問題点としては(5)台地面と(2)上位段丘面の新旧関係であったが、確定的な結論にまで至らなかった。